

The background of the entire page is a repeating pattern of pink cherry blossoms and swirling vines on a light cream-colored background. The pattern is dense and covers the entire surface.

遊び足

木村茂登子

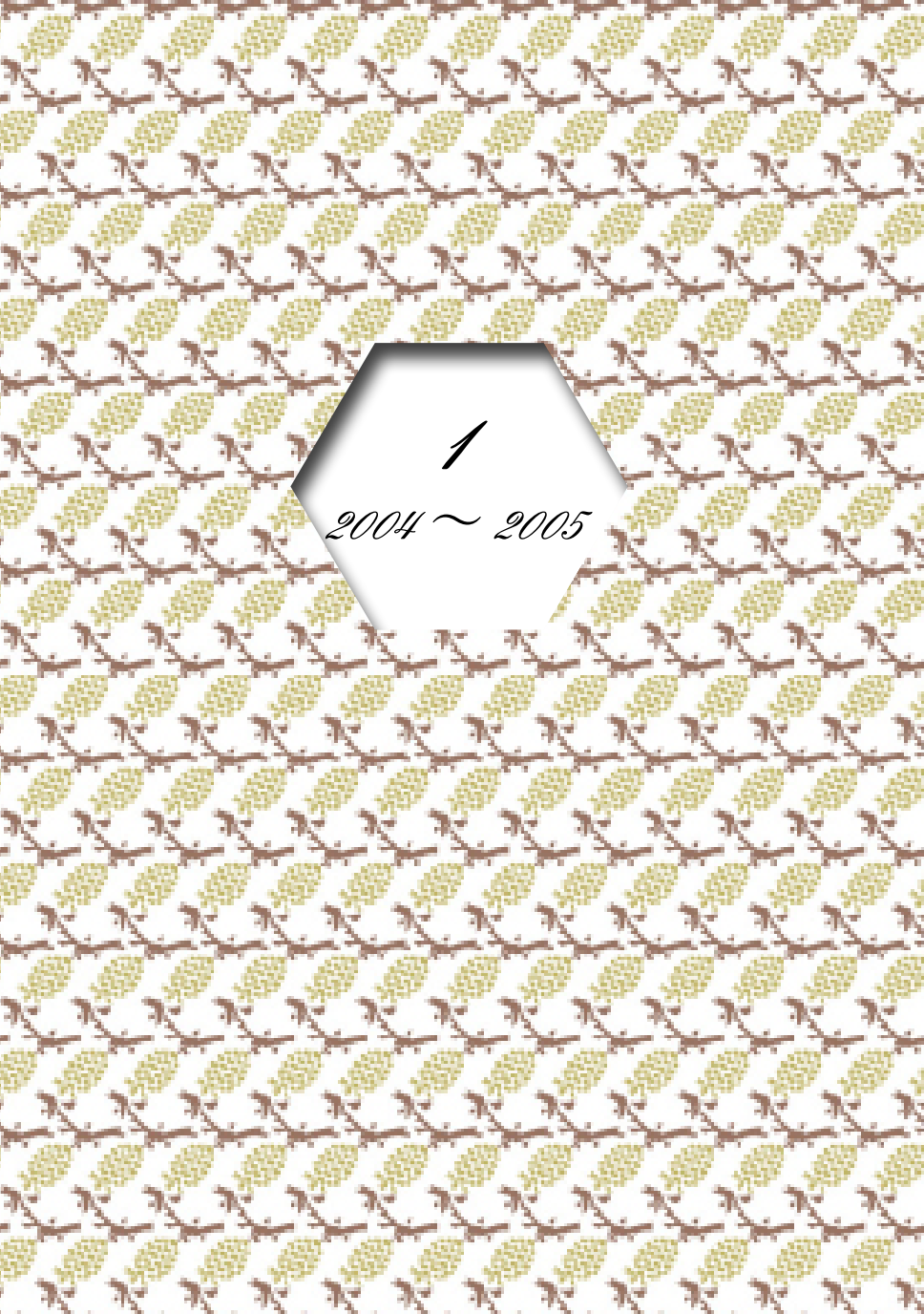
A decorative border of pink cherry blossoms with green leaves, framing the top and sides of the text area.

遊び足

木村茂登子

あを創刊十周年記念句集

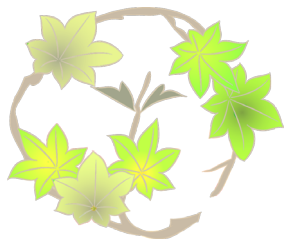
限定一部



1

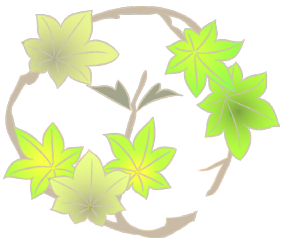
2004 ~ 2005

白菜の高値小分けで売られをり



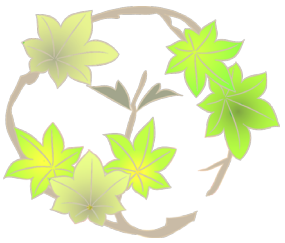
机辺の塵払ひてみもし文化の日

種なし柿小さな種を孕みをり



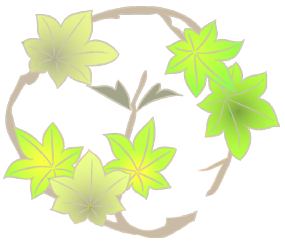
落葉掃く青いテントに住ふ人

火の色のかくもなつかし炉を開く



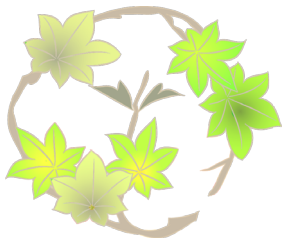
絵の中の半身の鮭も師走かな

白い花大好きことにシクラメン



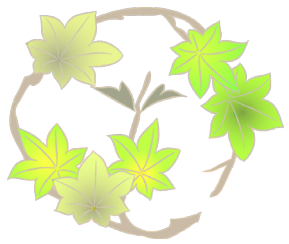
聖なる夜胎児のごとく眠りたり

白足袋の男の素性はかりかね



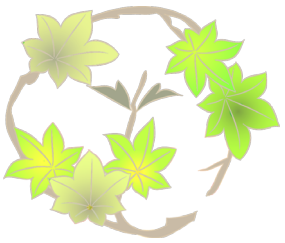
旧街道
お大師さんへ
冬うらら

両の手に
余る荷となり
年の市



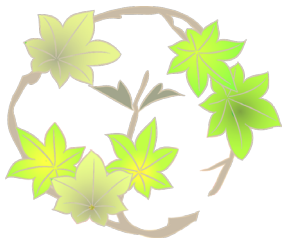
追分といふ七ツ辻雪催

牡丹雪この路次の奥行きどまり



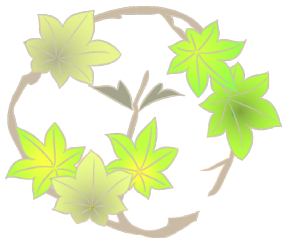
打ち出しの音おごそかや除夜の鐘

焼餅の焦げの加減の良き雑煮



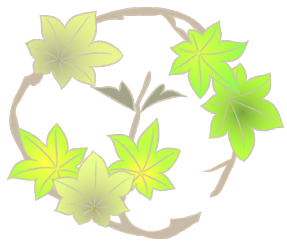
初詣氏神木花開耶姫命

如月や鑑真和上の御前に



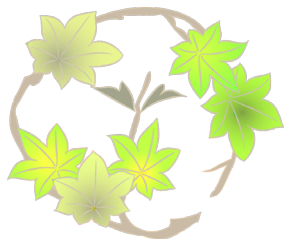
薄墨の「山雲」春寒料峭図

山焼や許されし火の美しく



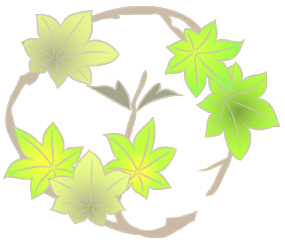
つ
つ
ま
し
き
女
世
帯
や
針
供
養

浅
草
寺
淡
島
様
へ
針
納



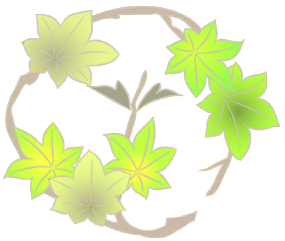
探梅や見所「瘦・老・蕾・稀」とか

ガレのランプ春の灯を点じをり



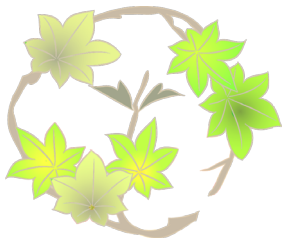
剥がされさうな訃報二月の掲示板

マカデミアンナッツもブレンダー雛あられ



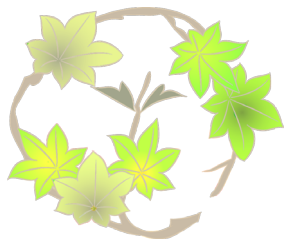
女子高の雛まつれる作法室

女子高の雛まつれる作法室



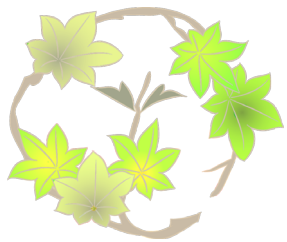
幾山河家靈とともに古式雛

あるときは灯影にこはき雛の顔



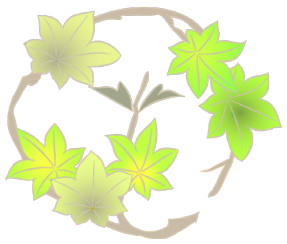
お雛様三泊四日の桃の宿

檜扇も笏もあづかり雛納



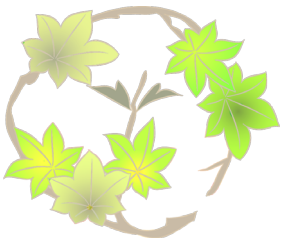
四月馬鹿獲物の方が上手にて

花だより
日文矢文で北上す



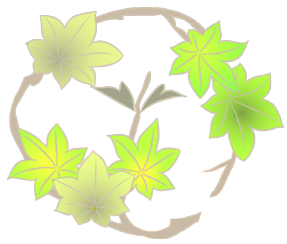
時は春召されて天にパウロ二世

平野啓子が語る「源氏」や春の宵



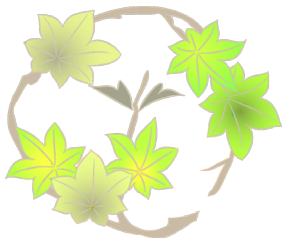
春の夜や上原まりの平家琵琶

清明やことに垣根の紅要臈



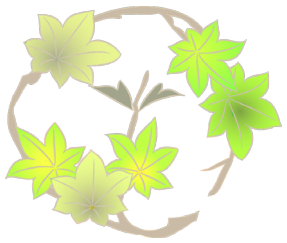
金銅の小さき釈迦牟尼仏生会

微笑みて釈迦牟尼甘茶受け給ふ



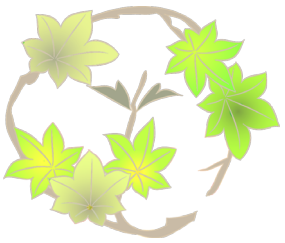
人波の一人となりて花疲れ

夜桜や大人の時間限りなし



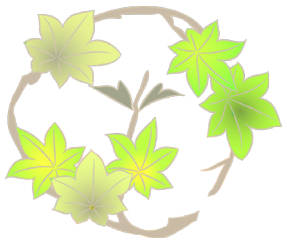
飾り太刀男はかつこ良く生きよ

薫風や後ふりむかず退院す



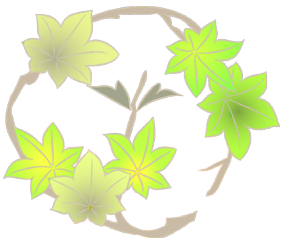
あぢさゐの何色に染む小さき毬

きてみれば花散りいそぐ五稜郭



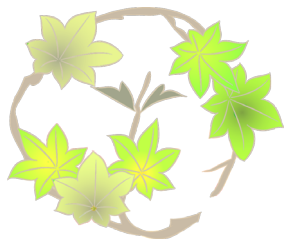
カルガモの子の数しかとかぞへかね

コンソメよりポタージュが好き
桜桃忌



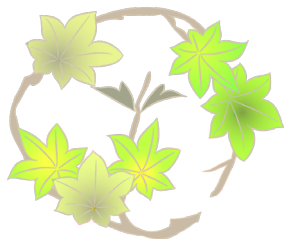
コンビニのそれもおむすび桜桃忌

目に見えて風わたりくる青田かな



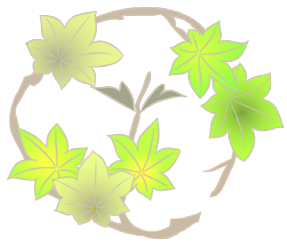
風鈴やまどろむ前後鳴つてをり

抜け殻のまだみづみづし蟬の声



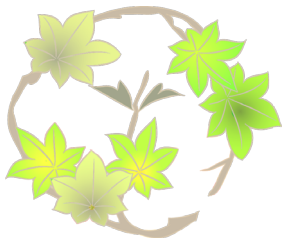
迎火や胡瓜のお馬疾く戻れ

送火やお名残惜しめ茄子の牛



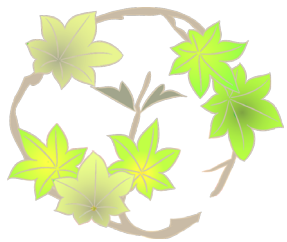
一分の黙黙禱の間の蟬しぐれ

三つ編のお下げでありし敗戦日



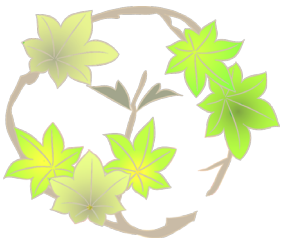
終戦記念日スイーツとなるさつま諸

崩れてもくずれても白夏の雲



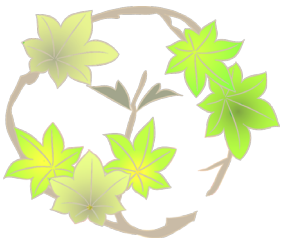
田の神を祀りて深き夏木立

みのりの秋もつたいないが世界語に



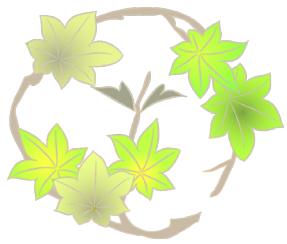
天高し
跣で踏める
土を恋ふ

したたかに
打ちし酒の
香栗御強飯



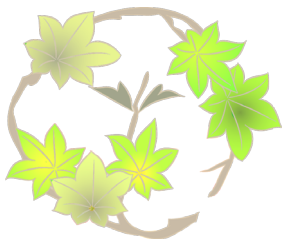
風の盆越中八尾坂の町

三味胡弓弾くは男衆風の盆



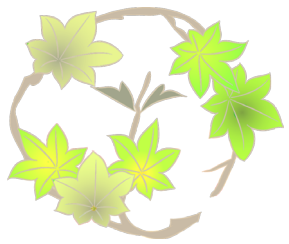
雪吊りや蛇飛ぶがごと縄打たれ

パン焼ける匂ひ木枯の交差点



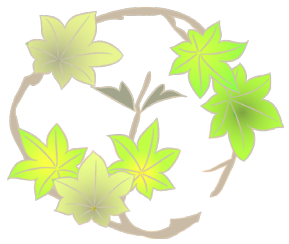
夕顔の五辨にはしるうすみどり

夕顔の棚のあたりの暮れなづむ



枯色をして蟪蛄の動かざる

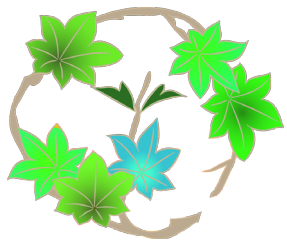
絹の道砂漠の月の孤独かな



2
2006～2007

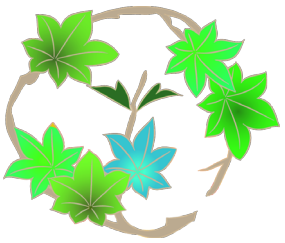
饅頭の塩味しみじみ義士祭

父
母
の
掌
の
中
に
手
を
七
五
三



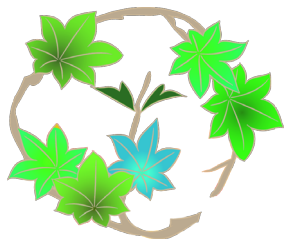
携
帯
も
パ
ソ
コ
ン
も
な
し
冬
う
ら
ら

大
師
み
ち
旧
東
海
道
初
時
雨



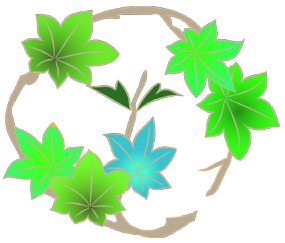
万年屋奈良茶飯跡初しぐれ

川崎市川崎区大師町初しぐれ



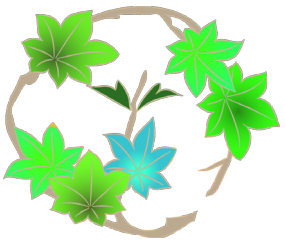
久
寿
餅
も
ト
ン
ト
コ
飴
も
初
し
ぐ
れ

オ
ホ
ー
ツ
ク
の
幸
を
抱
い
て
流
氷
群



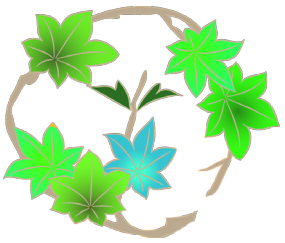
流水の下豊饒の命の環

金星のほかなにもない冬の空



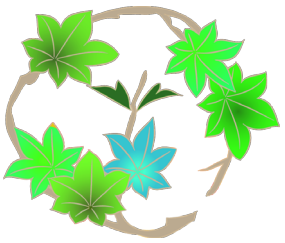
古暦
ま
ず
は
感
謝
の
日
日
な
り
し

根
深
汁
京
と
越
後
の
あ
わ
せ
味
噌



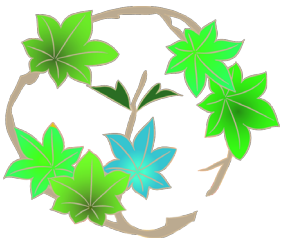
両の手で受ける煮えば根深汁

浜鍋や仕上げに葱をざつくりと



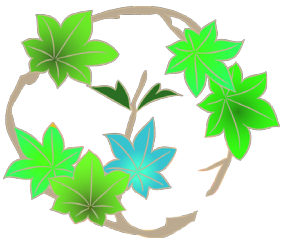
神
神の
こぼれ
出さうに
宝舟

雪
霏霏と
この世の
音を消し
つ積む



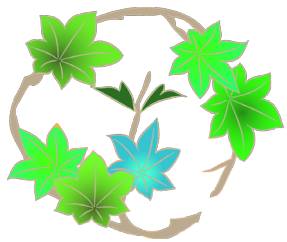
み
仏
は
ガ
ラ
ス
の
中
に
春
寒
し

春
の
夜
の
雪
つ
も
る
ら
し
コ
コ
ア
の
香



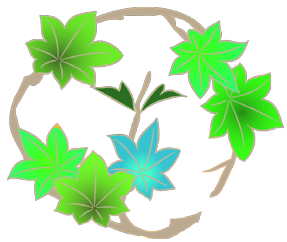
猫の恋住宅街にけものみち

風花や托鉢の僧一列に



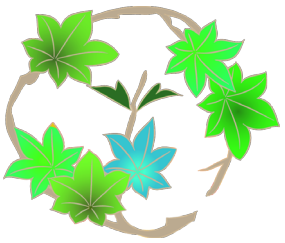
杉の片木まあたらしきに桜餅

花冷や扉も錆びし穴弁天



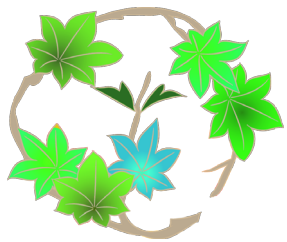
春風や観音様の「遊び足」

自画像の春風に吹かれてゐるやうな



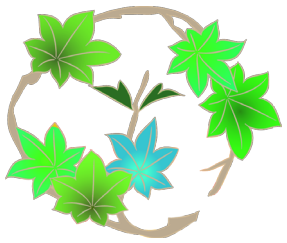
税務署を出て春風にとりかまれ

薫風や地図に載らない風の道



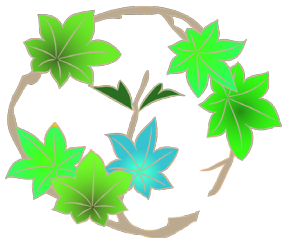
御
仏
を
間
近
に
拝
す
花
御
堂

花
祭
こ
の
味
ほ
か
に
な
き
甘
茶



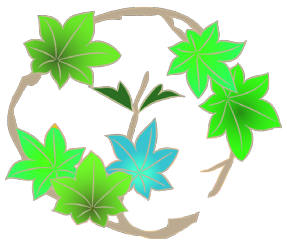
春の午后束の間ねむるくせつきて

四顧の間の天を指さし松の芯



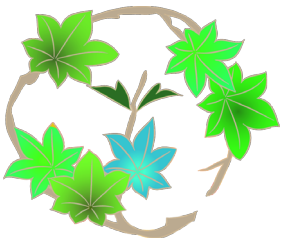
ふんはりと花の向うの五重塔

亀一つ泳ぎはじめし日永かな



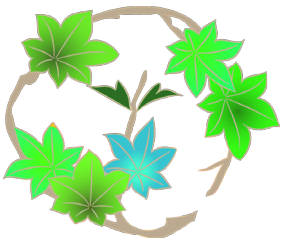
みどりの日戦禍の記憶われにあり

翡翠の来るべき杳の日永かな



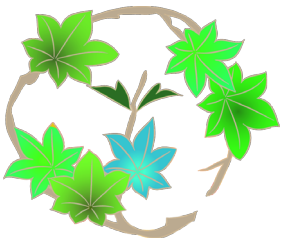
郭公や焼きたてパンの耳うまし

浴衣縫ふ針持つことをなつかしみ



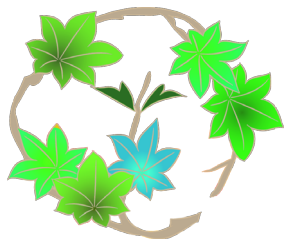
大輪の芍薬ほろとをはりけり

蛇行して日の暮てゆく梅雨の川



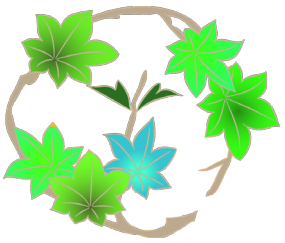
十葉を挿して
厠を明るくす

翡翠の狩の
衣の派手やかに



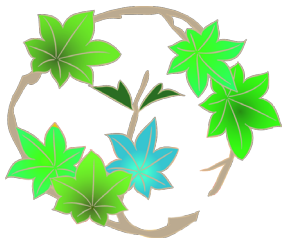
翡翠の狩一瞬の水飛沫

雛僧の青きうなじや万灯会



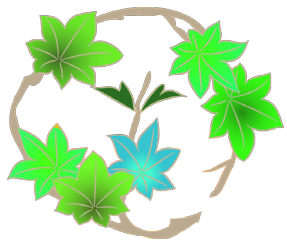
山車を曳く男の子も唇に紅さして

敗戦日しみじみ白い米を磨ぐ



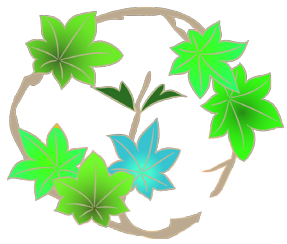
握りしめ噛みしめ新米の塩むすび

朝顔の団十郎とは海老茶色



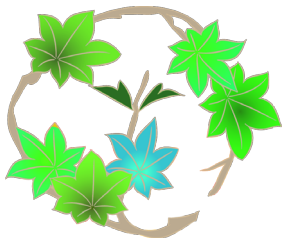
星
月
夜
地
球
も
宙
の
中
の
星

垣
間
見
る
芭
蕉
布
の
女
端
然
と



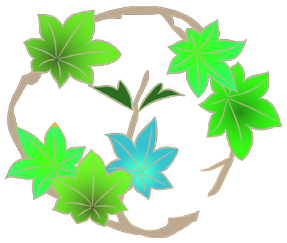
爽
籟
や
洗濯
物の
乾
く
音

秋
風
や
抱
へ
て
温
き
フ
ラ
ン
ス
パ
ン



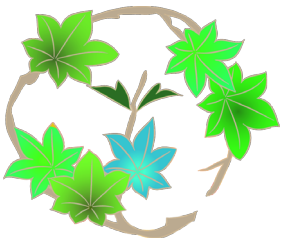
晩学の今が本氣の秋灯下

も一つの自分探さむ秋の旅



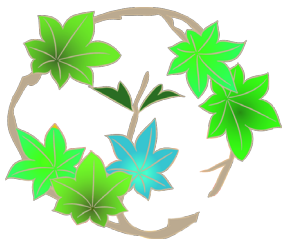
良
夜
な
り
戯
画
の
鳥
獣
現
れ
よ

画
か
れ
て
こ
ほ
ろ
ぎ
の
四
肢
た
し
か
な
り



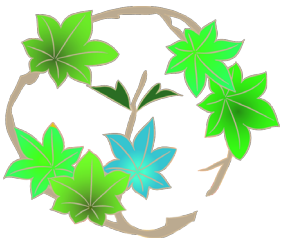
我が家の秋の灯ぞ旅終る

枯るるとは安らぐことと野の姿



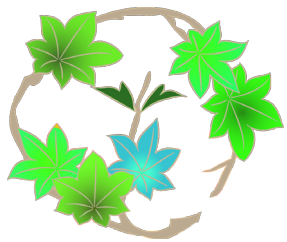
甲州葡萄は月の雫になりました

秋晴や男は何も手に持たず



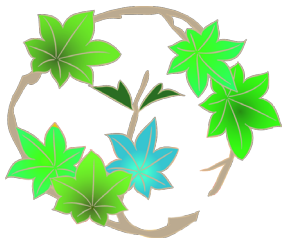
秋晴や女は何時も何か持つ

立冬の頬にひんやり化粧水



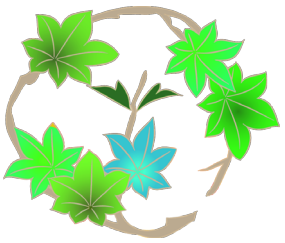
円空仏も木喰仏も冬うらら

紅葉してさくら終りも華やげり



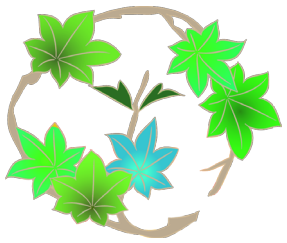
綺麗寂といはれる老で終りたし

発車ベルホロホー
ルル春隣



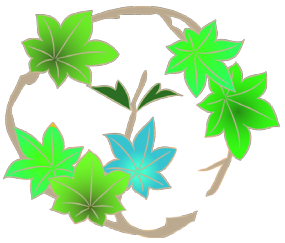
讀む曆元旦漱石の猫登場

山茶花を散らし本日休診日



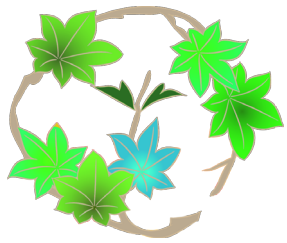
新米のこれぞ窮極塩むすび

冬休受験子に説く「米百俵」



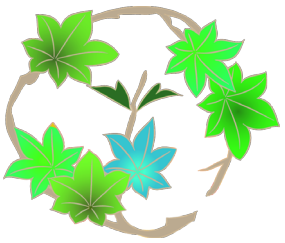
肩書はもう何もない日向ぼこ

冴返る高架の下の日本橋



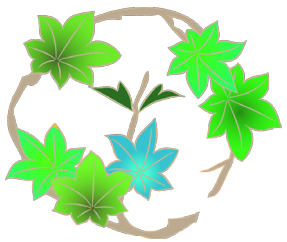
二
ン
月
や
老
身
調
ひ
が
た
き
日
々

箱
根
駅
伝
の
ぼ
り
ト
ツ
プ
は
神
の
足



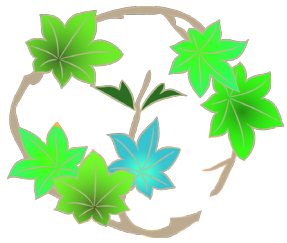
日
脚
伸
ぶ
立
ち
読
み
咎
め
ら
れ
も
せ
ず

啓
蟄
と
い
ふ
日
俄
に
旅
心



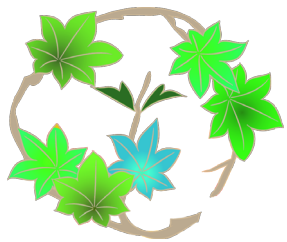
東京が一番乗りのさくらかな

店先にまだ束のまま猫柳



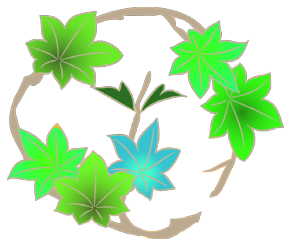
餘寒なほ黄楊の小櫛の油滲み

ここからは私道春泥なつかしく



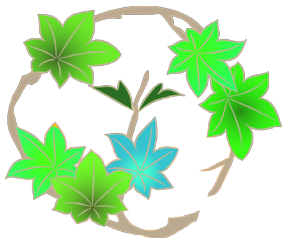
木の芽風
吹き抜けて
女坂

天地に生
気のみち
てみどりの
日



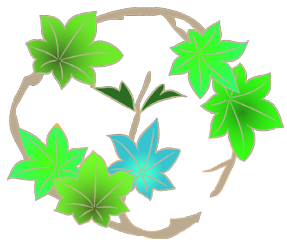
真鯉一つ足して今年の鯉のぼり

タンポポの綿毛名残もみせず失せ



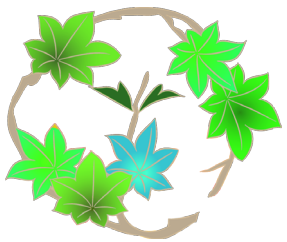
水鳥の一羽つきりの五月晴

初夏の森に木霊の声みちて



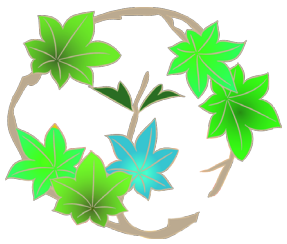
緑
陰
や
久
方
振
り
の
手
辨
当

見
返
し
の
『
あ
を
』
の
青
色
風
薫
る



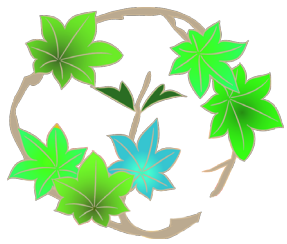
青
田
渡
る
風
も
同
行
遍
路
道

牧
水
も
夢
二
も
青
は
寂
し
と
い
ふ



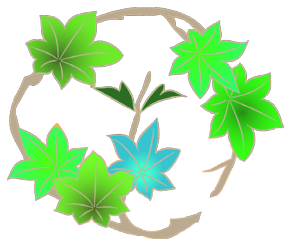
葉桜となりて名木やすらげり

遠雷や古代の蓮の朱が揺らぐ



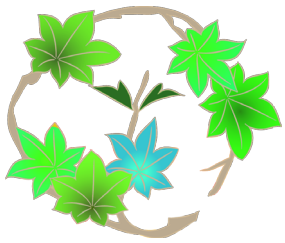
私だけの哲学の道著莪の花

夏嵐来襲田園さからはず



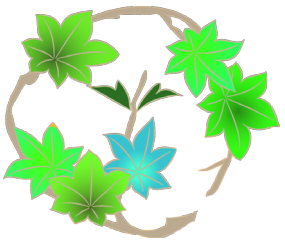
梅雨寒の火のなき暖炉よそよそし

大岩魚池に飼はれてみじろがず



絵
手紙の南
瓜の威
風堂々
と

あ
ぢさゐの
歴史の
人にシ
ーボ
ルト

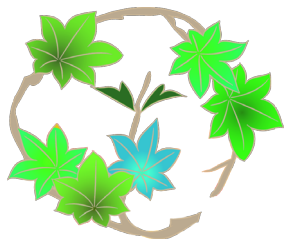


ク
ー
ル
ビ
ズ
一
点
豪
華
腕
時
計

174

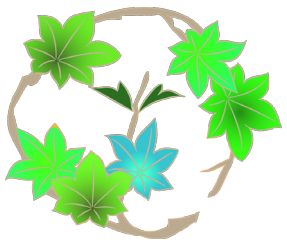
順
待
ち
の
竹
葉
亭
の
籐
の
椅
子

175



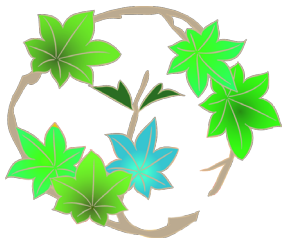
秋
桜
白
亜
の
館
の
扉
口
ま
で

秋
天
の
大
丸
窓
や
観
覧
車



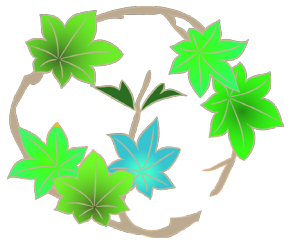
敬老の日ながらばこそ識ることも

七草の数に入らねど吾亦紅



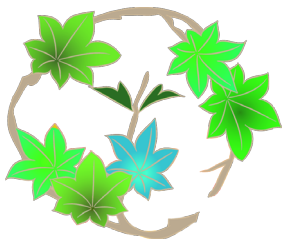
肅然と炎暑の兆し原爆の日

たまはりし喜寿の齡や菊日和



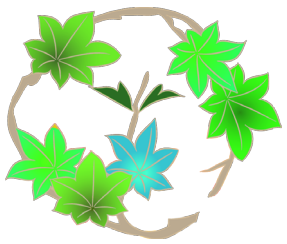
十三夜身辺音もなく更けて

表替して新涼の夕ごこち



秋霖や午後休診を知らず来て

孤愁味はふべしと地虫鳴く





3

2008 ~ 2010

雪
吊
に
松
は
ん
な
り
と
納
ま
り
ぬ



冬の鏡人につれなくして鬱に

終り佳しさくらもみぢのきれいさび



漱石忌居ながらにして道後の湯

立冬と思へばの空・水の色



水
琴
窟
の
遠
い
ひ
び
き
も
冬
立
つ
日

牡
蠣
床
の
海
水
割
っ
て
あ
ら
は
る
る



大根の筋目を見せて茹あがる

寒餅の五色がそろふ海鼠形



アールデコの館の春はバルコンに

茹でたまご素直に剥けず春の風邪



著 莪の花波打つ厚き葉の中に

大木の葉がふはふはとみどりの日



美僧と和す般若心經花まつり

はんなりと羅召され月光像



ブ
ー
メ
ラ
ン
薫
風
裂
い
て
凱
旋
す

切
り
分
け
た
西
瓜
の
種
の
位
取
り



あぢさゐが見守つてゐる通学路

遠富士の良く見える日の月見草



藤波や千寿の源氏物語

新涼のマイバス・キッチン・マイトイレ



狗尾草は踊り上手よ抜かずおく

剪り取れば風にも耐へぬ芒かな



芒野は黄泉路のごとし月なくば

茹で上げて芋名月の衣被



横笛も琴も平家や今日の月

緒嶽山總持寺くまなく秋日和



坐してゐるだけで癒され秋の寺

幕の間を立つとて置きし秋扇



雨戸閉づ音しめやかに十三夜

少し鬱目深にかむる冬帽子



金星が頑張っ
てゐるクリ
スマス

病院の背丈に
合はぬ椅子
の冷え



停車場てふことばなつかし冬日中

冬空のかすかな色のさまざまに



腓 寒く螺旋階段降りて来し

掌にのこる水玉たびら雪



日輪を聚め立春の鶴見川

カニカマのこぼれ落ちたる恵方巻



ワイパーにとろけるネオン春の雨

御包のみどり児に似て座禅草



関
伽
桶
の
家
紋
橘
春
彼
岸

白
隠
の
片
手
の
公
案
涅槃
槃
西
風



虚子展や港が見える丘の春

春風の軌跡か虚子の筆の文字



春眠のやうなる虚子のデスマスク

さくらんぼ分けて奇数と偶数と



宵宮は嫋々たるや笛の音も

ひよつとこの腕たくましや里神楽



家人みな旅に出てをり柿若葉

藤波や舞妓の抓み簪も



父の日や父には枕詞なし

夕立や唐三彩の馬嘶く



向日葵やゴッホの好みモネ好み

奈良の秋今は思ひ出日吉館



白玉の不揃ひはさて冷え加減

ひらかなでさらにやさしく秋の草



新米や朱鷺舞ふ里のコシヒカリ

看護衣のまま新涼の仮眠室



投げ入れて向き様様の花芒

千歳飴五歳にきざす男前



蛸風のやうに干されて秋日和

うやうやしく初生りの柚子一つ受く



五十肩
肩
まで
沈め
冬至
風呂

風
一ツ
二ツ
三ツ
欲し
初御
空



松の内一番静かなる二日

割り落とす初日のやうな寒卵



大寒の朝の目薬注し損ず

左大師右石観音道日脚伸ぶ



春の川たゆたうてゐる曲り角

味噌汁に散らすに一つ露の臺



花吹雪いさぎよしとも狂ふとも

オフエリヤ尼にはならず花筏

遊び足

終





あそ あし
遊び足

著者 木村茂登子

発行日 2010年11月13日

発行人 佐藤喜孝

装丁 佐藤喜孝

発行所 竹僊房

製本所 武蔵製本

二〇〇一年創刊の「あを」は来年で十周年を迎えます。「九邀」の詩のやうに「花を藝^うゑて以て蝶を邀^{むか}ふべし。……書を藏して以て友を邀ふべし。徳を積みて以て天を邀ふべし。」ではありませんが、正に良友を邀へるべき俳句を作る、これが「あを」の一つの目標です。そのころを形に表したのがこの『限定一部』の句集です。

この句集はあを編集部のデータベースにある『あを』『飛行船』『獐』句会・吟行等のデータより作家各人が二百五十句抄出し発表年代順に一本にまとめたものです。句集名は喜孝が興の赴くまま付けさせていただきました。

二〇一〇年十一月八日

佐藤喜孝